

表象の可能性と不可能性

「表象されること／されないこと：東アジア人文学への新たなアプローチ」国際シンポジウム

張 政傑

「表象される／されない」をテーマとした国際シンポジウムで何が表象されて何が表象されないのかという思いを抱えながら、2日間のシンポジウムに参加した。以下は私の記憶の一部を文字によって表象したものである。

2016年1月30、31日の2日間にわたって、東アジア、ヨーロッパ各国から研究者が集まり、名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センターの主催で国際シンポジウムが開かれた。今回のシンポジウムでは、多くの国から、歴史、文化、映画、文学、美術など、異なる分野の研究者が一堂に会し、各人の研究成果をシェアし、活発な議論が行われた。2日間という限られた時間ではあったが、人文学全般を対象とする、東アジア研究の実験的な場になったことは間違いない。

シンポジウムのタイトルは「表象されること／されないこと：東アジア人文学への新たなアプローチ」(Un/Representation: New Approaches to East Asian Humanities)である。選択的なプロセスである歴史と文化の表象は、学術研究、メディア、芸術などの領域を問わずに内包と排除の両方を伴うものである。このような「表象の可能性と不可能性」の二重のプロセスから生み出されたイメージに研究者はいかに向き合うのかを模索すること、そして日本と東アジアの文脈における様々な代理表象の表側と裏側の両面を探究することが、本シンポジウムの目的である。また、それによって近代日本におけるヘゲモニックな言説に内在する権力関係を透視し、新たな研究アプローチを提案することも望まれる。本稿では、シンポジウムに際して配布された要旨や関連資料をもとに、2日間にわたる発表と議論の概要を紹介することにしたい。

新世代パネル

2日間にわたるシンポジウムは、名古屋大学文系総合館のカンファランス・ホールで開催された。午前中の新世代

パネル「空の近代」は、歴史、美術、文学、映画など、各分野の若手研究者の企画である。発表者と発表タイトルは以下の通りである。

大山僚介

「1930年代～敗戦までの「航空日本」像」

鈴村麻里子

「パリ包囲(1870～71)以降の美術にみる「気球」

藤田祐史

「[天の川]句考——芭蕉と小説」

潘沁

「ラピュタへ飛ぶ—『天空の城ラピュタ』におけるクラウドスケープ」

大山僚介氏は、1930年代から敗戦に至るまで「航空日本」という言葉がいかに使用され、どのような意味を持ったかについて、当時の新聞記事や「航空日本」を謳う歌詞から「航空日本」像について考察した。戦争のイメージのみならず、国力躍進の期待と、「航空日本」という言葉に凝縮されるような、近代の技術発展によって「空」という領域で先進国と比肩しようとする欲望も窺えることを論じた。

鈴村麻里子氏は、1870年から1871年のパリ包囲戦の戦中戦後に表された気球図像を紹介し、その展開を概観した。モダンな都市生活の一要素とされる気球は、パリ包囲戦において脱出の道具として多用され、再び注目されるという経緯を持つ。中村岳陵という日本画家の作品における気球を例として、当時の特殊な歴史文脈で愛国心と希望のシンボルとされた空飛ぶ気球の可能性を考察した。

藤田祐史氏は、川端康成の『雪国』において「天の河」が思いだされる場面に焦点をあてながら、作品に内包される神話的な関係を指摘し、星座と作中人物の構成する重層性を明らかにした。小説において書かれた俳句のように、異なるジャンルの関係性における新たな読みを試みるものである。

潘沁氏は、「近代」という概念の検討から、いかに近代の映画と空の表象が関わり合ったのかを紹介しながら、宮崎駿の『天空の城ラピュタ』をケーススタディーとしてアニメーション技術が空の表象に与える影響を解明した。クラウドスケープの描き方を分析し、そのテクノロジーと自然との共生関係のあり方について論を展開した。

セッション1

1日目の午後のセッション1の発表者と発表タイトルは以下の通りである。

アレクサンドラ・コプルスキ

「明治を設計する——エンジニアと技術者たちは新国家建設のためにいかに日本の近代という神話をめぐって働いたか」

笹沼俊暁

「陳舜臣文学のなかの台湾——冷戦期の作品を中心に」

劉文兵

「「表現せよ」と「表現してはいけない」のはざまで——中国抗日映画・ドラマの戦争表象における抑圧の問題」

アレクサンドラ・コプルスキ氏は、テクノロジーに焦点を当てながら明治時代の鋼鉄の技術発展を考察することによって近代日本の歴史を再考する。近代の商品と消費行為、鉄道や自転車による移動、環境とエネルギー基盤施設など、明治期に関する近年の歴史研究を回顧しながら、「鉄の近代 (Modernity of Steel)」と名付けられる、生産に必要な燃料・コークス (coke) に重点を置き工業化した鋼鉄の生産プロセスの改良経緯を明らかにし、テクノロジーの進化と環境問題の交錯する新たな歴史的パースペクティブを提案した。

笹沼俊暁氏は、戦後日本の大衆社会における「中国」イメージの形成に多大な影響を与えた作家・陳舜臣の小説において、いかに台湾や台湾人が描かれたか、あるいは描かれなかったかについて考察した。冷戦期の在日華僑系知識人の錯綜する思想文脈と陳舜臣の小説との関連を明らかにした。マイノリティとして、そして中国と台湾の政治対立の「戦場」としての在日華僑社会という空間に形成された「中国」表象を取り上げた点は興味深い。

劉文兵氏は、フロイトの「トラウマ」の概念を援用しながら、戦前戦中から現在に至るまでの中国抗日映画・ドラマを時代別で紹介し、日中の社会状況を映す鏡である映画

やドラマにおいて各時代の中国人の抱えていたトラウマ的な記憶がいかに表れているかを論じた。また、ホミ・バーバの他者表象と差別に関する言説を取り上げ、「日本」という他者のステレオタイプ的なイメージがなぜ抗日映画に執拗に映されるのかについて分析した。

セッション2

2日目のセッション2の発表者と発表タイトルは以下の通りである。

イナ・ハイン

「日本メディアにおける沖縄の表象——支配的イメージと反物語」

鄭珉娥

「韓国と日本の慰安婦ドキュメンタリー——表象における(不)可視化された女性」

眞野豊

「学校空間におけるクィアネスの黙殺と想像」

イナ・ハイン氏は、まず沖縄の歴史と日本とのアンビバレントな関係をふまえて、映画やテレビドラマを例として日本社会における沖縄のステレオタイプ——「癒し」や「熱帯」のイメージを概観した。そして、ポストコロニアリズムの理論を援用し、2000年代以降の映画やテレビドラマの製作者が擬態 (mimicry) という形で主流の沖縄表象に抵抗しながら沖縄の現実を表現したということ論じた。のみならず、メディア表象を分析する上での、ポストコロニアリズムに対するアプローチの可能性と限界を提示しようと試みた。

鄭珉娥氏は、ドキュメンタリー映画においていかに「慰安婦」が表象されたかについて、『22』(中国)、『「記憶」と生きる』(日本)、『レッドマリア2』(韓国)という3本のドキュメンタリー映画の表現手法を分析し、長い間、国際関係、ナショナリズム、男性中心主義というような重層的な権力関係によって歪められ、あるいは不可視化されてきた「慰安婦」を表現するために、女性の視点の必要性を唱えた。性的労働者の問題に照らし合わせて、国境を越えた女性の連帯による「慰安婦問題」の解決について、真摯に問おうとする姿勢がうかがえた。

眞野豊氏は、学習指導要領や文部科学省の通達などを例として、日本の学校における「性の多様性」が抑圧されてきた実態を概観し、国家による性的マイノリティへの

暴力の構造を解明した。発表者自身が公立学校で行っている事例を検討しながら、既存体制に表象されていない差別を暴き出し、クィアネスを想起させるために学校教育の可能性を問い、異性愛前提の学習指導要領の転換、教員に対する情報支援と研修制度の整備、体系的なカリキュラムや評価のあり方の検討などの課題を提示した。

東アジアの人文学の挑戦

このレビューを書く際、まだ記憶の中に鮮明に残るシンポジウムの様子と感覚を表現するためにあえて自分の書いたメモを読みながら活字化してみた。メモしたものと、色々な理由でメモしなかったもの、あるいはメモしえなかったものとの間に交錯している、様々な既存構造による制限——常に見えないが——に直面する時、意識的にせよ、無意識的にせよ、選択的なプロセスが常に暗黙のうちに作動されていることが分かる。それは今回のシンポジウムの中心テーマ「表象されること／されないこと」と深く関わっているだろう。いかに選択するのか、あるいは選択する責任とは何かという問いは、まさに全体討議の中心問題である。また、異なる分野の研究者の発表によって、ナショナリズム、ポストコロリアリズム、東アジアの国際関係、性的マイノリティーなどの権力関係を伴うコンテキストにおいて生じた多様な表象——歪んでいるか否かを問わず——にいかに向き合うのかという大きな問題が提起された。

異なるコンテキストに内包される様々な見えない制限が権力関係とも関わる形で確実に存在する。そのような透明に近い既存の権力関係を暴き出すために、単一の視点ではなく、異なるパースペクティブが必要だろう。一方、最も越えがたいのは、近代の知的体系を形成する際に決められた各学問分野の境界線であり、それによる学術領域の間のヒエラルキー化である。テクノロジーと環境問題の接合点に焦点を当て新たなパースペクティブを意欲的に提示したアレクサンドラ・コブルスキ氏の発表は、ある意味で現代社会の危機と「経済成長至上主義」や「理系優先思考」に直面した人文学の可能性を模索し、再考する試みである。表象されることと表象されないことを考える際には、知識人としての責任を負いながら、地域、ジャンルや学術領域を超えて人文学の価値を批判的に問い直すことが重要となる。それを探究する超域的な国際シンポジウムは、これから益々必要になってくるだろう。